

V. ヴァイゲルの思想における諸問題

名 木 田 薫

岡山理科大学理学部

(1994年9月30日 受理)

(一)

たとえサタンと全ての悪人が神の中に立ち、行き、生き漂っていても¹⁾という。サタン等も神の中に存在しているのである。やはりここでも神という語は神の働きという意味で言われていると思われる。このような考えについてコイレは神はいかなる内容規定もできず、無人格であり、神性とは無であって同時に一切の根源でありその意味でそれは全体であると評している²⁾。従って神は包蔵態としては一切であり、顕現態としては無であり、神は何よりも大きく何よりも小さいとしている³⁾。かくて神については神が光であるということと暗であるということ、否定的なものと肯定的なものとの双方のことが証言され、それら二つは永遠においては対立を構成しないとされる⁴⁾。ところで被造物は永遠の自立的な無限の本質の陰であり肖像であるから⁵⁾という。ここでは神について本質という表現をしている。人格的に生きているものについては本質という如き表現は一般的には使用しないのである。かくして神は人格神であると同時に被造物の根源をなす本質という性格をもっていることを意味する。そこで人が神の中に、神が人の中にいるといえる。更にまたこういう考え方が身体的なものを軽視していることと関連しているとも考えられる。「神は唯一人本質 (Wesen) であり、あらゆる本質の本質である。決してこれとかそれとかではない。さもなくば神は全てのものでも、また全てのものの上にあるものでもなくなってしまう。神はまた今日でも明日でもない。神はさもなくば永遠ではなくなってしまう⁶⁾」。

確かに人格神ではあってもこういうものであろう。時空を超えた存在であらう。「神は全てのものである」といっても凡神論的に神が全てのものになっているという意味ではないと思う。「ある」というとこういうことになってしまいはしないのかと思う。全てのものをあるようにあらしめていると考えるのならよいであろうが。「神は全ての本質の本質、全ての生きものの生命である⁷⁾」。全ての本質の本質と考えると神と被造物とが連続的にならないか。III. Lieferung S. 117においても完全と部分という対比が使われているが、パウロでいう完全と部分というのは連続的意味では言われてはいない。ヴァイゲルではそうではなくて連続的な印象をうける。また「神は単に中心ではなくて、また全被造物の円である。即ち神とその意志或は言は……(中略)……被造物を把握しており、とり囲んでいる。……

(中略)……全ては神の中にその本質に従って存せねばならぬ⁸⁾。これで分かるが、神とその意志が被造物を把握しとり囲んでいるという通り、それ自体の存在としての神自体をいうのみではなくて、神の意志つまり神の働きも“神”という語の中に含めて考えているのである。そういう具合に考えれば神の中に全被造物が生きていると言える。「神は単に中心ではなくてまた全被造物の円である⁹⁾」。神の中に全てが存しているという。panentheistischである。また神は全精神の概念であり、場所である¹⁰⁾という。そういう場所の中で天使やサタンさえも作用しているのであろう。かくして神とは一個の固有な人格をいうのではなくて、全てのものを含んでいる如きものとなろう。一切をその中に包括している。全被造物が神の中で行き、立ち、生きそして漂っている¹¹⁾というのだが、ここでいう神は聖書的な厳密に人格的神か否か疑問が生じてくる。被造物は神によって造られたのだが、それは神の中にあるとは言えないのではないのか。神が摂理していてそういう摂理の中にあるとは言えるであろうが、神の中にあるとは言えぬ。ヴァイゲルはこのように考えるので、我々の中に神があり神が我々の中にあるとも言っているのであろう。こういう考えをみると、神という語を“神の働き”とか“神の摂理”，“神の霊”という内容でも使っているように思われる。そこで彼では神の霊という語はでてこないのではないのか。このことがそういうことを裏付けている。神の外にはいかなる地獄もサタンも被造物もありえぬ¹²⁾とも言う。反神的なものまでも神の中にあるとされているとすると、ここでいう“神”とは人格的な神そのものとは考えられぬ。なぜならもしそうだとすると神に反するものを神自身が自己の中にもつことになってしまうからである。かくしてここでの神とは神の働きとせねばなるまい。また神は全被造物の本質である¹³⁾ということばも神が人格的な主体的な神としてではなくて使われていることを示す。このような点について W. ニックはヴァイゲルは神は全被造物を自らの内に包んでいるが、いかなるものによっても把握されることはないと強調していると評している¹⁴⁾が妥当なことである。またコイルによると次の如しである。「より優れたものがより劣ったものを「包む」のであり、この意味において魂は身体の中にあるのではなくて、逆に身体が魂の内にある。同様に神が世界の内にあるのではなく、逆に世界が「神の内」にあるのである¹⁵⁾」。神と世界、魂と身体との関係はこうであるとされるが、神と世界についてはともかく魂と身体との関係について優れたものと劣ったものということ考えてよいのかと感じざるを得ない。更に神はまず被造物の中にあつて意志する者になり意志となる¹⁶⁾という。神はかくして人の意志であることになる。神の意志と人のそれとは別々のものではなくなる。一体というよりも一であることになる。このように考えられるので、人は神の中に神は人の中という如きことを言っているのであろう。神の働きのようなものも神と呼んでいるのである。神の本質はその不変の意志から区別されない¹⁷⁾としていることも分かる。神の存在とその働きとを一体的に考えているのである。神は私は“ありてあるもの”という。また“神は愛である”といわれる。かくして存する、成る、働くの原理として愛がある、働いているということになる。つまり愛によって働く存在ということである。更に

また「完全な真の善であるところの神を見出し、感じ、味わう時に¹⁸⁾」という。神と真の善とが同格扱いされている。こういう考え方は聖書における神観とは異なる。神は義とはいいますが、善とは特に言っていない。こういう考えがあるので神が私の中にあり私が神の中にあると言っているのであろう。自立的で無限な本質或は善は自分を知らせるためには別の本質(存在)を生んだ¹⁹⁾。つまり人間というものの存在がさかのぼって善である神という存在を示しているのである。また「神は自己自身に対して永遠に無意志である。……(中略)……彼は何も意欲しない²⁰⁾」。旧約聖書では神は人の行ないを見て悔いたとされている。これは擬人的表現といえればそれまでのこととも言えなくはないけれども。「しかし言と被造物の中で、でもって、それを通して、……(中略)……意欲する者となり、とりわけ最初に生まれたキリストにおいてそのようになる²¹⁾」。「今や我々はキリストを通して神の意志を唯一の中心として措定する²²⁾」。これほどまでにキリスト中心的に考えているのなら、一方で「神の中に生きている」と考えることが不釣合ではないであろうか。たとえコイレの評するように²³⁾魂の最内奥における叡知的認識においては神が魂に現前し魂に生得的であるとしても、このような疑問は残るのであるし、更には逆に強められてしまうのである。

さて、「あなたの内心的な心の目が神の光によっててらされる時……(中略)……あなたは神的説教をきき……²⁴⁾」とのべている。神の光がてらすという。彼自身の体験を反映している言葉と思う。こういう表現でしか表現しえぬ如き何か特別の体験があったのであろう。こういう点について W. ニッグは彼が神秘主義的な目を与えられたとしている²⁵⁾。そしてこういう目を通して神の奥義へ入りこんでいったとしている²⁶⁾。照明という体験が思考の根本にあるという。それはよいとして、こういう体験を直ちに神秘主義的といえるのか。なぜならそれによって神のイエス・キリストにおける啓示が啓示として当人に現われていることがまず第一に根本的なこととして存しているのだからである。全ての可視的なものが不可視のものの開示だというようなことが第一義的なら、神秘主義的というのもいいかもしれないけれども。かくして神秘主義的か否かのしるしは照明が何をどのように照明するかによるといえよう。彼ではこの照明は少しとも一般の人間の認識にも関係しているようだが、「内的言葉、父の声のみが内からきかれねばならぬ²⁷⁾」という彼の言葉はただ一般的認識というのではなくて、やはり根本的には信仰的問題があったと思われる。ただ「全てのは内からでてくる。内的な言葉が外的になる。言葉は肉となる²⁸⁾」。内外の一致は内から外へということである。彼にとっては内的という語は精神的という意味である²⁹⁾。更に彼は「彼は根底へと入ってゆく。そしてそこで全人としての更新となる³⁰⁾」。ここでいう Grundt が何をさしているかが問題である。同じところで彼は「私は今や彼の別の歩み、別の本質、別の生命において彼が信じていることをみる」というのだから、「別の生命」がそこで芽生えてくるようなところである。「真の信仰は……(中略)……心の内的根底からであるから Röm 10³¹⁾」ともいう。神の国は内的な魂の根底の中に、精神の中にある³²⁾ともいっているが、そういうよりも根底の中にではなくて根底をぬけてしまったところだという方が即事

的ではないのか。なぜなら魂の根底という如き固定的なものはもはや存しないのではないのか。自我があって初めてそういうものが存するといえるのではないのか。また「完全な善は魂の根底の中に見出され、感じられ、味わわれる³³⁾」。善ということなので、それは人の心の奥底に見出される。色々の欲がすてられ清められてゆくと、心の奥底にはすみ切った世界が自ら現われるのである。しかしだからといってそれを神とみていいのだろうかと感じるのである。またこういう内的根底 (Innern Grundt) に関してそれとルターの教義との関連について彼は後者への適合を示している³⁴⁾とされている。

(二)

「我々は我々自身から引き離され……(中略)……我々は我々自身に対して死につくす³⁵⁾」。我々は我々自身から、我々は我々自身に対してという。このように自己の内での分化があることが分かる。内的自己と外的自己、霊的自己と肉的自己との分化である。「真の信仰は人間を……(中略)……人が信じているところのその者に対する性質をもつようにする、或は信仰によって人は彼自身から引きはなされキリストにあずけられて。そしてこれが最高の自由である³⁶⁾」。自由とはつまり自己からはなされることである。そしてキリストの方へとかえられることである。信じているキリストが人の内に住むことによってこのようになってゆく。「アダムが彼の自己の死滅において神からうけ入れられた。……(中略)……事実神は彼において人間となり、そしてアダムは神化された。なぜなら神はそこでは自身人間であった³⁷⁾」。人が罪に対して死ねば神がそこでは人となり、逆に人が神化されるという。「神化」という。これは意志が一体となっているということであろう。人が世に対して死ねば自らそうなるであろう。要するにコイレによると「自己自身に対して死なねばならない。——これがヴァイゲルの宗教上の教えの内実である³⁸⁾」。同様のことはニッグも述べている³⁹⁾。

「そういう内的な祈りよりの慰めよりも全世界はすてられ易いのである⁴⁰⁾」。全世界を全てあわせても内的な慰めには及ばない。丁度イエスが種々の試みにあわれた時、世界の中の色々なものをみせられてもそれらに対して内面での神との結びつきを示してそれらを斥けたことに対応していることである。「人間が時間的なものを全てすてて内的な宮へと立ちよるならばそこでは父と子とは一つであり……⁴¹⁾」。「全てすてて」ということが大切である。心のつながりが切れているのである。世に対して死んでいるのである。「内的人間、霊的人間はみえないものの上にのみ目を向けている⁴²⁾」。この世に対して死んでいることを別言している。「のみ」という語によってそのことの徹底ぶりが分かる。「神に従順たろうとする者は全ての人間に従順でなくてはいけないと Theologia germania はいふ。悪人に対しても⁴³⁾」。悪人に対しても従順であることによって全てをすてて世に対して死人であることが実証される。「全ての彼の業を何故ということなしに愛から行う者は全世界に対して死んでおり、神の中に生きており神は彼の中に生きて⁴⁴⁾」。何故という具合に理由をとわぬ姿勢は大切である。ヨブ記でもそうだが人としては理由を問いたいのである。しかし最後には風の

音の中に神の声をきいている。こういう状況では神の意志と人の意志とは一つになっているともいえる。こういう意味で神と人が相互に内在しているともいえる。たとえこういう状況にあっても人の意志が神の意志に完全に従っているとは言っていない。ヴァイゲルがよく言うが、人が人をにくむという。にくむという以上神の意志に完全に従って行為しているのではないことを意味している。そこでにくむということが生じてくるのである。

「全ての欲求や運動は止まねばならぬ⁴⁵⁾」。人としてのこういう活動は人の欠如から来ている。そこでいかに活動しても根本的欠如を除きえない。停止することのみが解決だ。そこではじめて欠如もきえる。「不動の内的なもの⁴⁶⁾」が味わわれねばならぬというのが本当である。救いは動の中にはなくて静の中にあるといえる。「ニコデモは自分自身をにくみ、自分自身の意志を殺し、……(中略)……彼自身に死に自己を否定せねばいけない⁴⁷⁾」。イエスがニコデモについて言っていることについてこのように述べている。徹底した自己否定をいう。「安息をもとんとすればその者は……(中略)……彼自身の生命を否定し、にくまねばならぬ。キリストと共に全く死につくさねばならぬ。彼自身のうちに神を期待せねばならぬ⁴⁸⁾」。精神の中に人の祖国、安息はあるので、心が世のものから自由になるためには物質的なものをすてねばならぬので固よりこのようではなくてはいけない。たとえ少しでも心の糸が物質的なものへとつながっているはその細い——どんなに細くても——糸によって心の安息は失われてしまう。その細い糸を伝って毒が注入されてしまうからである。こうして初めて「甘い状態⁴⁹⁾」が生じるのである。死は甘き眠りであるが、現実に死ぬ前に死において甘さを体験していると言える。

「全てのものはそこでは意志を気にはかけはしない。即ち意志はキリストにある肖像の中にあるまでである⁵⁰⁾」。神という安息の中にあっては人の意志という如きものは問題にならぬのである。無にも同然である。キリストの霊と二即一の関係にあるので人としての“自己”の意志という如きものは無いのと同じである。人の意志が問題外となるので安息が可能となってくるのである。人の意志が活動している限り、人は安息に至ることはない。「だからこそ神は永遠の安息であり、祝福、全被造物の終わりである⁵¹⁾」。ここで終わりといわれている。被造物としての人、自己というものが終わりに至って初めて安息があるのである。終わりという語は目的とも考えられるのであろうが、ここで終わりとした方が意味の上で適切であろう。正に被造物の終わりなのである。死なのである。パウロもいう如く私と被造物的世界との相互的死である。人は死んで初めて安息に至りうる。「同じものが神の意志の中にあって歩む⁵²⁾」といわれるように、こういう状態では神の意志と人の意志との分裂はない。「神自身全てとなった⁵³⁾」通りである。分裂があれば神自身全てとなったとはいえない。神の外に存している何かが残ってしまうのである。「自分をにくみ……(中略)……自分の魂にも注目しない⁵⁴⁾」。自分に属する全てをすてることをいう。“にくむ”とまでいっている。“魂”さえも注目の対象にせぬという。世に死き切ることをいう。「自分をすてたことをしらないような人間は全ての事物を与えられるであろう。……(中略)……一瞬といえ

ども彼がすてたということを注目しないで常に不動で……⁵⁵⁾」。自分が一切をすてたことを意識しないし知りもしないということ。自己に関係する自己がすてられている。右手のしていることを左手に知らずなということである。報いを求める心は常に自己を意識しているからである。

ところで彼は次の如き趣旨のことをいっている⁵⁶⁾。即ち外的貧しさと内的貧しさととの二種の貧しさがあるとして前者はそういう具合に召されている人のためのもの、後者は霊的のものであって心の正しい謙遜の中であって、心の全ての慰め、快樂、内面性の喜びにおいて内的人間の真の放棄を指示しているという。以上である。そしてこういう霊の貧しさについては「神の霊の貧しさを人の意志なしに与えようとはしない。そして人間は神の意志なしにそれを所有しえない⁵⁷⁾」。霊の貧しさは神も人も望んで初めて与えられるものという。「霊の貧しさを、即ち罪、全被造物そして自己自身から全く分けられた心をもたねばならぬ。こういう心が平静といわれる⁵⁸⁾」。霊の貧しさの中身をここで更にいっている。要するに心が一切のものからはなれていることである。こうして初めて「神の国を見出し感じ、味わい、或は所有⁵⁹⁾」できることになるのである。

「死は甘美な快適な眠りである……（中略）……私を送った者はあなたを浄福にはできぬであろう（Mors）⁶⁰⁾」。「私とキリストとは一つであるのだ（Mors）⁶¹⁾」。死とキリストとが一つなので甘美といいうるのである。死を送ったのが神、キリストである。かくして死は甘美なのである。キリストが送ったものである限りその現象的な形は何であれ甘美なのである。「私は天空の円の下に生きている全てを支配している（Mors）⁶²⁾」というように死を擬人化して語っている。これほど死というものがただ単なる客観的な事実としてでなくて、いわば生きているものとしてうけとられているのである。こういう死の権力といえども神、キリストに対してはその力は及ばない。人を滅ぼす当のものがいわば生きものなのである。生きものであればそれ自体が死ぬこともあるのである。「私」という用語でもって死を語りうることは死の死ということが可能性としてみられていてできることである。死は甘き眠りという場合、死は根本的には自分の肉体的死のことをいっているのではない。パウロのいう「私はこの世に死に」の死のことである。今すでに死んでいる死のことである。かくしてそういう死においてキリストを見、知り、神を知ることができる。そこで死は甘き眠りなのであって、「甘い」のである。根本的にはこういう状況が存している。パウロがいう、私はこの世に留まるのがよいか迷っているということにも対比していることである。本当は死んでキリストと共にいるのがよいという。世を去り、キリストと共にいることによって甘き上にも甘いのである。甘さの二乗である。そこで「死」とヴァイゲルがいう時、今すでに死んでいる死と将来の肉体的な死との二つの死が一つの死として観念されているのではないかと思う。甘き眠りということについても今すでに眠っているのである。決してその時が来て初めて永遠の眠りにつくのではないのである。

「死は甘き眠り」ということは現在の世と来世との一体化ということと関連しているが、

ヴァイゲルでは人の身体的側面への関心は低い。そこで今すでに精神においてキリストと一つになっていると死は更にキリストと一つになるので、更に甘くなるのである。一方パウロでは霊のからだという如くからだへの関心はつよい。からだがあがなわれるのを待ち望んでいる。だからこそ死を最後の敵としている。また従って死が甘いとはいわない。死はどこまでも克服されるべきものであるからである。たしかにパウロでもこの世に対して死ぬことによって死という堺目はきえている。しかし死については甘いともからいともすっぱいともいってはいない。客観的にこえられるべきものなのである。

今すでに死に甘き眠りに入っているのである。その時になって初めて甘き眠りに入るのではない。すでに死んでいるということについて死ぬという意識は生じない。眠りという観念しか存しないのである。どこを見ても死というものはないのである。すでに“死”という語は死語になっているのである。いわば生しかない世界に生きているのである。キリストと二即一になる迄は生といっても死に支配された生でしかない。そういう生というか死ということともかくそういうものしかない。それが逆転したのである。このようにすでに生の支配する世界に生きていることが神の中に生きていることの背景にあるのである。生、生命、愛を神とすれば神の中に生きているといえる。自分がいずれ死後復活するので甘き眠りという如きことではない。自分個人の復活があるとかないとかという個人的なことは遠くに消えている。自己というものが消えると、人的つまり罪的世界は消えている。そこはもう神の造られた世界という他はない。神という存在を人は直接は知りえない。神の造られた世界の中にいれば神の中にもいってもよいであろう。世界が人的、罪的、私的という性格を失うと同時に神的という性格をもってくる。そういう世界の中に生きることによってパウロのいう如く生きるのも死ぬのも喜ぶのも苦しむのも全てキリストのためということがいえるようになるであろう。パウロのいう、死んでキリストと共にあるということがリアルであればあるほどキリストは人にとって生きているのである。当時と違い今は三階層的世界観は妥当しえないのでキリストと共にいるといってもその場所を具体的にイメージすることはできない。

(三)

「自分自身を神から無へとそらせることによってサタンはつくられた⁶³⁾」。また罪を自己自身への逆らった屈曲とするのは典型的にヴァイゲルの様式とされている⁶⁴⁾。そしてヴァイゲルによると悪には二種あるとされている⁶⁵⁾。即ち被造物は有限なので不完全である。こういう形而上学的悪（不完全性）、これと道徳的悪（罪）とは異なる。後者は被造物の自発的行為だから。そこで前者の悪は必然的でも後者の悪は偶然である。彼はこの罪が世界の成立において積極的役割を果していないと断言することはためらう。以上である。しかも人が罪に墮落したのは偶然によってなので人の本質はその後をかえられてはいないという⁶⁶⁾。たしかにそうであろう。本質的にかえられていれば悔い改めも回心も存しえないであろう。

この点についてコイレは罪は偶然性にすぎず人の意志の中にしか座をしめぬとしている⁶⁷⁾。アダムについて彼は精神のうちに、肉体のうちにではなくて生きていた、しかし意志の受領後に彼は肖像を失った、精神から外へ、肉体の中へと落ちた、神から被造物へとおちた⁶⁸⁾。このように精神から肉体の中へおちたという言い方、また肉体のうちにではなくて、精神のうちにという言い方、これらはこれでよいのか、二者択一的にきこえるのであるけれども。肉体的側面の軽視という傾向がここにもでていっているのではあるまいか。「アダムにおいてよりも、その子孫である我々において百倍も多く⁶⁹⁾」。自分のものでない善を自分のものと思っと思いついて自分自身を求め見出すあり様はアダムより我々においてはるかに強いという。こう言いながら良心と聖霊を結びつけたり、或は解いたりする鍵は自己の心の中にあるという。世に死につくして初めて双方のことをいいえよう。

この世からの出口、信仰、天国、神の国への入口は人が自己のニヒル性や罪性について深く認識することのうちにある。この点はヨブ記をみても分かるであろう。苦しんだ挙句に風の中に神の声を聞いている。こういう状況では自己のニヒル性を感じるということのうちに自己の罪性についての認識も入ってこざるをえまい。ヨブでも彼が色々なものを失うが、その失うものについて彼は神に不平をいう。失なわれるものへの執着という形で罪が現われてきている。このようなニヒルということと罪ということとは一体である他はないのである。単にニヒルというのみではなくて、罪も加わることによってニヒルということが増巾されている。そして人をますますこの世からの出口へと追いやる。単に増巾ということではなくて、罪性が問題となることによって初めてそういう罪からの解放とかそれと同時に死からの解放とかいうことも生じてくる。罪が問題化せぬと全てのものがすぎてゆくということで、そういう万物のあり方を悟ればそれでよいことになってしまう。ヨブが風の中に神の声をきいたというのはパウロがダマスコ途上でキリストが現れたとうけとったというのと同じ事態をいうのであろう。「風の中」という如きごくありふれた自然現象の中に神の声をきいたという。従って風以外のいかなるありふれた自然現象の中にも神の声をききえたことであろう。つまり自然の中というよりも自分の心の中に神の声をきいたのである。そういうことなしに自然の中に神の声をきくことは生じえないのである。

「私は聴罪司祭を私のもとにもっている。……(中略)……私は私の中に Absoluerer をもっている (Audifor) ⁷⁰⁾」。自己の中に赦す者をもつということは死においてキリストと一体化されているからいえることである。なぜならキリストは赦す者であるからである。

「聖霊における良心がそういう証言を彼に与える。他の人の口或は手なしに⁷¹⁾」。負債ある者を許したように我々の負債をお許し下さいという願い (Mt 6:12) については聖霊における良心がその証言をしているという。このように聖霊と良心とを結合している。良心はここでは単に人の良心ではなくて、もっと高次のものになっている。「聖霊は神によるキリストを通しての赦しの担保である⁷²⁾」。赦しへの確信があつてこのようにいいうる。担保という以上何か具体的にそういうものをうけてもっているという実感あつてのことでもあろう。

無となっている彼自身の中にキリストが生れていると信じられているのである。ここでは神そのものとはいわずに聖霊とっている。聖霊という言い方は何ら問題はないであろう。パウロと同じであるといつてよい。こういう考え方との関連において信者は岩であるという考えが彼にはしばしばみられる⁷³⁾。こういう彼の考えについて諸研究者の評価は次の通りである。まず S. E. オツメントは帰される義ということについてヴァイゲルの次の如き考えを指摘している。つまり帰される義は人の罪をおおいはしない。ただ本質的な内在と再生のみが真に罪をおおうであろう。以上である⁷⁴⁾。次に W. ツェラーによると次の通り。ルター的な晩餐の教義がヴァイゲルの怒りを引きおこしたとしており⁷⁵⁾、ルター的な帰される義というのは彼の考えと矛盾していることを示している。また平信者は祭司のところへゆく前にまず神とそしてその後彼の心の中で彼の隣人と和解したのではなくてはいけない⁷⁶⁾。更にまた正統的司祭は否定的にみられている⁷⁷⁾。更に W. ニッグによると「ヴァイゲルによると外的な所属は二次的なこと、内的な言が大切である。聖者の不可視の集まりが大切である⁷⁸⁾」。このように教会についても見えざる教会が大切とされている。

人が神に立ち帰ろうとする時には内的戦いが生ずる。その際「理性と火花はいう、人は神における義と真理を愛すべきである、と⁷⁹⁾」。ここで理性と火花とを並べている。「火花」については「真理の、そして善の自然的愛の光の火花⁸⁰⁾」とっていることからみて悪人の中でもこういう火花はきえてはいないとしているので、またここで自然的とっていることからみて神に直結する如きことをいってはいないと思う。理性も自然、火花も自然ということであろう。キリストの霊という如きことではないのであろう。そして「これら両者（古いアダムという存在と新しい被造物）の間での常なる戦いは身体的な死までつづくのである⁸¹⁾」。人の中での新旧両人間の間での戦いは死ぬ迄つづくという。しかし一方で彼は人は神の中に、神は人の中にあるという。こういう神と人との相互内在にあればこそこういう戦いが存しているのである。単なる神秘主義ではないことが分かる。こういう点については W. ニッグや S. E. オツメントも指摘している通りである⁸²⁾。このうち W. ニッグによると「思弁的関心はいつも倫理的方向付けを通して抑制されている。……（中略）……彼の思弁的陳述は凡神論として特徴づけられることは許されない。なるほどそういう陳述は凡神論的要素を含んでいるがそれは神の力が全てをつらぬいているとの意味においてである」。このように神秘主義的、内面的要素があるとしても同時に心の中のキリストは地の上で働くものとも考えられているのである。

(四)

「キリストは最初に生まれた者として父の中における恵みそのものである。そして神の指そのものであるゆえに、キリストは全てのものの中で最強である⁸³⁾」。最初に神によって生まれさせられた者としてキリストを考えている。つまり世界の創造もキリストによったということになる。モーゼ、エリヤとイエスが会った時の聖書の記事もこういうことを示

唆している。従ってまたキリストは元来地に属しているのではないことが分かる⁸⁴⁾。「そういう身体的な誕生或は処女における人となることは次のこと以外の何をも意図していない。神自身が人間であって全てにおいて全であろうとすること。神は我々の中に住み、我々が彼の中に住むべきだということ。我々は彼の中で永遠に一つであるべきだということ⁸⁵⁾」。イエス・キリストの受肉において神による人の救いという目的のみでなくてこういう点をみている。神は我々の中に住み、我々が彼の中に住むべきだということ。神と人との相互内在ということである。神が人の中に住むことを示そうとしているということをキリストのでき事においてみるのは正しい。あがないという意味と同時に。ところでキリストの昇天は場所的に生じたのではない⁸⁶⁾というのがやはり場所的でもある他はないと思う。心の中のでき事として考えるだけでは不十分ではないであろうか。父は全被造物をみだし、いかなる場所にも結合されていない⁸⁷⁾のは事実としても、神の居給う霊の世界へ帰ることは上下ではないとしても場所的ともいいうるであろう。

更にヴァイゲルのキリスト観については次の如き指摘がある。まず W. ニックによると、「ヴァイゲルによると人はキリストを今なお彼が心をその下に理解したところのかいばおけの中に見出す。キリストは彼が聖書とよぶところのおしめの中に包まれている。……(中略)……史的イエスは人に単に人が内的キリストを見出すための道を示したのである。永遠のロゴスは史的イエスを越えている⁸⁸⁾」。内におけるキリストが重視されていることが知られる。次にコイレによると、「ヴァイゲルも……(中略)……魂に対する直接、無媒介の働きかけを主張する。……(中略)……彼もキリストを内なるロゴスと同一視する。内なるキリスト、真に照明し、浄化、魂を聖化する光たるキリストは彼らには魂の内に生まれるものとしてと同時に、魂に生得的なもの (*lux insita nobis*)、人間の心の内に神によって刻み記された神の掟 (*lex divina a Deo in corde humana inscripta*) として魂それ自体よりもなお魂の近みにあるものとしてうけとられた。……(中略)……ヴァイゲルも普遍的啓示乃至靈感を説く教説の賛同者であった⁸⁹⁾」。キリストが生得的とされている。人が無になることによってこの生得のキリストが真に顕わになってくる。そして一回的な歴史上のキリストと対応することになる。このように考える他ないのである。罪に墮することによっておおわれてしまっているのである。そして世に対して魂を売ってしまっている。ここから罪との、世との戦いへと、自由へと至り無になってゆくにつれて生得のキリストが顕わになってくる。内なるキリストの誕生である。ただしキリストが光として生得的とはいいすぎではないのか。墮罪によってもキリストを認識しうるような力を人に残しておかれたというべきであろう。しかしそれ自体は神でもキリストでもないであろう。そういう力によってキリストを知りそのキリストが無の器たる人の心に入ってきて、小キリストに人はなつてゆく。このような存在として人は固有な存在となつてゆく。またコイレは「両者の神秘的同一性こそが人間が神の本質的義に参与することを可能にしているのである⁹⁰⁾」という。両者、即ち我らの内なるキリストと我らのためなるキリストとは分離できない。

ヴァイゲルもその一人である霊性主義者の立場からもこうであるという。たしかに一回的なキリストが存してこそ罪、世との戦いへと人はかり立てられてゆく。かくして我々のためなるキリストが我々の内なるキリストを触発する。眠りから目ざめさせてくれるのである。以上はキリスト自身についてであるが、更にこういうキリストとマリアとの関連について F. リープによると大略次の如くである⁹¹⁾。キリストは天から来るマリアを通して生れたが、このマリア自身先在的神的根源をもつ。故に罪ある肉体とのあらゆる接触から守られている。かくしてこの天的、超地上的な肉体はキリストを通して回心したキリスト者へ移される。そこでキリスト者は今この世にあってなお二つのからだを与えられている。天的なからだをもってのみキリスト者はその地上のからだの消去の下で浄福へと入ってゆく。以上である。更に F. リープはヴァイゲルのキリストについての見解をグノーシス的と評している⁹²⁾。いずれにしろヴァイゲルは「神は人間をうけとり、人間を更新する。人の中で支配する。人の中で生きる。かくて神は人間となった。……（中略）……かくて人は神の子となる⁹³⁾」と考えている。これは直ちにはキリストの受肉のことをいうのであろうが、しかし信者一般についても言えることである。こういうことがいえる根拠は意志、良心における神との一致があるからである。

注

- 1) Valentin Weigel : Sämtliche Schriften I. Lieferung 1962 S. 61
- 2) アレクサンドル・コイレ : パラケルススとその周辺 1987 (鶴岡賀雄訳) S. 225
- 3) ibid S. 226
- 4) W. Nigg : Heimliche Weisheit 1975 S. 112
- 5) I. Lieferung S. 63
- 6) ibid S. 75
- 7) III. Lieferung 1966 S. 118f
- 8) I. Lieferung S. 92
- 9) ibid S. 92
- 10) ibid S. 65
- 11) ibid S. 59
- 12) ibid S. 60
- 13) ibid S. 60
- 14) W. Nigg : ibid S. 111
- 15) アレクサンドル・コイレ : ibid S. 221
- 16) I. Lieferung S. 60
- 17) ibid S. 60
- 18) III. Lieferung S. 117
- 19) I. Lieferung S. 63f
- 20) ibid S. 90
- 21) ibid S. 90
- 22) ibid S. 91f
- 23) アレクサンドル・コイレ : ibid S. 216「神とは魂の根底であり、そこに現前しており魂に生得的であり、

従って人間の魂において自己を認識するのは、神自身でありかつ同様に人間の魂は神において自己を認識すると考えられている」。人の心が無になればそこに現われるものは神或はキリストの如き存在以外にはないことであろう。しかし神が直接ここに現われるのならキリストという存在は不要になりはしないのか。

- 24) VI. Lieferung 1977 S. 62f
- 25) W. Nigg : ibid S. 103
- 26) ibid S. 104
- 27) ibid S. 106
- 28) ibid S. 106
- 29) ibid S. 106
- 30) V. Lieferung 1969 S. 49
- 31) ibid S.52
- 32) I. Lieferung S. 50f
- 33) III. Lieferung S. 119
- 34) W. Zeller : Die Schriften Valentin Weigels 1940 S. 26f
- 35) V. Lieferung S. 82
- 36) ibid S. 62
- 37) III. Lieferung S. 13f
- 38) アレクサンドル・コイレ : ibid S. 207
- 39) W. Nigg : ibid S.100
- 40) III. Lieferung S. 83
- 41) VII. Lieferung 1978 S. 352f
- 42) V. Lieferung S. 78f
- 43) II. Lieferung 1964 S. 56f
- 44) III. Lieferung S. 83
- 45) I. Lieferung S. 69
- 46) ibid S. 69
- 47) III. Lieferung S. 25
- 48) I. Lieferung S. 69
- 49) ibid S. 69
- 50) ibid S. 67
- 51) ibid S. 67
- 52) ibid S. 67
- 53) ibid S. 67
- 54) III. Lieferung S. 14
- 55) III. Lieferung S. 74f
- 56) III. Lieferung S. 54f
- 57) ibid S. 55f
- 58) ibid S. 57
- 59) ibid S. 57
- 60) IV. Lieferung 1967 S. 78f
- 61) ibid S. 88f
- 62) ibid S. 87
- 63) III. Lieferung S. 10
- 64) W. Zeller : ibid S. 12
- 65) アレキサンドル・コイレ : ibid S. 228f

- 66) I. Lieferung S. 66
- 67) アレキサンドル・コイレ : ibid S. 233f
「罪は意志の内にしか座を占めず人間の本性乃至本質を損ったり穢したりすることのできぬ「偶有性」にすぎず、かくて人間の自由を破壊しえぬ。この故に人間には自己固有の意志 (Eigenwille) を自由に放棄し、自己自身の内で自由意志を破壊し、神の意志に自らを委ね、かくして一自由に一奴隷意志を実現することが許されているのである。この自己放棄ということの内にこそ霊的自己は存し、……(中略) ……この霊的死において霊的死を通じてこそ霊における再生は成るのである」。このように人の本性は罪によって汚されてはいない。
- 68) I. Lieferung S. 66
- 69) III. Lieferung S. 11
- 70) IV. Lieferung S. 107 更にS. E. Ozment : *Mysticism and Dissent* 1973 S.241 参照
- 71) II. Lieferung S. 60
- 72) VI. Lieferung S. 75
- 73) W. Zeller : ibid S. 50f
- 74) S. E. Ozment : ibid S. 233
- 75) W. Zeller : ibid S. 29
- 76) ibid S. 59
- 77) ibid S. 60
- 78) W. Nigg : ibid S. 113
- 79) I. Lieferung S. 74
- 80) ibid S. 71
- 81) V. Lieferung S. 11f
- 82) W. Nigg : ibid S. 111 S. E. Ozment : ibid S. 236
- 83) VII. Lieferung 1978 S. 382f
- 84) S. E. Ozment : ibid S. 230 F. Lieb : *Valentin Weigels Kommentar zur Schöpfungsgeschichte und das Schriftum seines Schülers Benedikt Biedermann* 1962 S. 177
- 85) IV. Lieferung S. 87
- 86) I. Lieferung S. 58
- 87) ibid S. 58
- 88) W. Nigg : ibid S. 105
- 89) アレクサンドル・コイレ : ibid S. 199
- 90) ibid S. 204f
- 91) F. Lieb : ibid S. 144
- 92) ibid S. 147
- 93) III. Lieferusg S. 14f

Einige Probleme im Denken von Valentin Weigel

Kaoru NAGITA

Faculty of Science,

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1994)

Erstens ist Gottheit Nichts, der Ursprung des alles, also das Ganze. Die Kreatur ist der Schatten, das Bildnis des selbständigen Wesens. Solches Denken ist panentheistisch. Zweitens muss man das Selbst morden, sodann sich Christus anvertrauen, und wird frei. Drittens ist die Erkenntnis der Sünde ist der Eingang zum Glauben, wo man sich von dieser Welt entfernt. Wenn man sich entfernt, beginnt der inneren Streit. Viertens ist Christus der Erstgeborene, also in allen Dingen der Stärkste. Der historische Jesus zeigt den Weg, wodurch man den inneren Christus findet. Gerade dieser ist wertvoll.